

資 料 編 目 次

明治31年9月の大水害	…………	1 p
明治42年5月の洪水	…………	4 p
明治44年7月の水害	…………	5 p
大正8年9月の大水害	…………	6 p
大正9年8月の水害	…………	13 p
大正11年8月の大洪水	…………	14 p
昭和7年の雨乞い 豊川地区編	…………	18 p
昭和7年の雨乞い 富丘地区編	…………	20 p
昭和12年2月、 吹雪の中での湧網線列車大事故	…………	21 p
昭和37年8月 台風9号対応の思い出	…………	22 p

明治31年9月の大水害

『聖徳太子碑40周年記念誌』（平成5年発行）から転載

（略）常呂川の氾濫

常呂村（当時）の入植者たちが最初に体験した大水害は、明治31年9月のものである。この時、常呂村には28年に入植した土佐団体24戸をはじめ、30年入植の岐阜団体12戸、それに大分団体約20戸が川沿いに点在していた。

秋の収穫時期が間近になってきた8月25日から降り始めた雨は、いつにない長雨となり、9月6日には暴風雨と化した。そして、7日には急激に常呂川の水量が増し、濁流が下常呂原野一帯にあふれ、混流の海と化した。

岐阜団体、大分団体の入植者たちは3メートルを超える浸水に追われ、家の屋根や大木によじ登って救助を求めるといふありさまだった。

この氾濫で農作物の収穫は皆無となり、被災者たちはわずかに水害の難を逃れた土佐団体12戸～13戸の収穫を全員に分配し、一時をしのいだほか救済資金の貸与を受けて生計をつないだ。

常呂村の被害状況は明かではないが、網走支庁が行ったと見られる明治31年10月10日の調査によると、管内4郡の被害総計は浸水家屋1,594戸、流失家屋65戸、潰れた家105戸、半壊の家45戸、畑の被害1,701ヘクタール、道路流失377,760メートル、橋梁流失1,476メートル、堤防流失2,250メートルという物的損害の大きさもさることながら、23人の溺死者を出すという開拓史上まれな惨状を記録するに至った。

この暴風雨は網走管内にとどまらず北海道全域、東北地方一帯を襲った未曾有のものであり、北海道だけでも10ヶ国43郡1区（350町村）に及んだ。被害は特に開拓の進んでいた石狩川、夕張川、十勝川の流域に大きく、事態を重視した時の北海道庁の杉田定一長官は政府に救済対策を要請した。

当時の政府は大隈重信を首相、板垣退助を内相とするわが国初めての政党内閣であった。杉田長官は自由党の結党以来、板垣とは同志であり、その強い絆もあって、31年度に救済費445,000円余、復旧費110,000円余を獲得することに成功した。板垣と同じ土佐出身で、板垣を師父と仰いで自由民権運動に身を投じた経歴を持つ初代北光社社長（野付牛：現北見）の坂本直寛（当時は浦臼在住）も水害救済のため奔走した。

こうして得た救済費も被災者が多かったためほんの一時しのぎにしかならず、被災者の窮乏はみじめなものであった。

一方、杉田長官は道庁内に北海道治水調査会を設置、治水計画への関心を示したが、この対象も石狩川など開拓先進地域から優先順位が決められており、後発の常呂川の治水事業が始まったのは大正10年に至ってからであった。

この間、常呂川は13回の大水害を引き起こし、分かっているだけでも77人の死者、行方不明者を出している。（略）

『常呂村史』（昭和12年9月発行）から転載（現代文で編集）

（略）明治31年8月31日から9月11日までの12日間途切れることのない豪雨のため、常呂川は大増水となった。当時は築堤護岸の設備がなかったため、たちまち濁流が渦巻き、土佐団体の一部12～13戸を残して原野一帯が泥海と化した。殊に岐阜原野並びに川沿方面に入地していた大分団体は身の丈余りの浸水により屋根あるいは大木に頼って救助を求める悲惨な事態になった。しかし、この激流には全く救助の方法もなく、ただ呆然としてなすすべもなく、ただ減水を祈るのみであり、その惨状は実に言語に絶した。

この損害は当年の収穫物全部を失い、殊に移住後日が浅く、何らの貯蓄のない住民はわずかに残った土佐団体一部の収穫を罹災民全体で一時しのぎとしたが、救済資金の貸与を頼りに悲惨ながらも復興の道を講じた。

このことは恐れおおくも天庁に達し、片岡侍従の采配により罹災者救済として一戸金17銭ずつご下賜金を賜った。（略）

『常呂町岐阜部落開基80周年記念誌』からの抜粋・編集

* 石塚利吉談

明治30年鑑沸に来て、31年に西3線の砂丘の下に入った。（略）

この秋の大水害でライトコロ川畔の人は、家も食料も失う惨状であったが、支庁から見舞いに白米1俵を全罹災者に下されたので、一同1粒1粒を有り難く噛みしめていただいたことは忘れられない。

* 山田栄太郎

（略）ようやくして苦心惨憺、秋の実りを楽しんでいたところ、8月に入り豪雨続きで大洪水となり、8月31日から9月11日まで12日間水浸しとなり、命からがら光永商店裏の丘の上に避難、野宿したが食糧がないので現中学校（注：現在の町民センター）付近まで筏で行き、ようやく常呂と連絡。食糧を運んでもらって飢えをしのいだが、かの小丘は我々の生命を守ってくれた恩のある丘である。冬になっても食糧は流されてしまったので、ドングリを拾って蒸し、乾燥させて唐臼でつき、皮を取り、石臼は内地から持ってきていたので粉にして、少し残った馬鈴薯や小麦粉を混ぜて団子にして食べた。

この水害の水位は、現在の光永商店の2階の窓の下縁であった。

（略）なぜこのような水位になったかと言うと、常呂佐呂間の川（注：ライトコロ川）の水がサロマ湖にたまり、天然の砂嘴が破れてようやく減水したのでこの惨状を呈した。

この苦い経験により翌年からは春先、サロマ湖の氷が落ちるのを待って、鑑沸裏の砂丘に水路を造り、早めに排水するようになった。その後はこのような惨事はなかったが、この大被害に人命事故がなかったことはせめてもの幸いであるとともに、このとき割合安全なところに占居の林喜太松ほか数名の決死の救助作業のおかげでもあった。この災害救助に努力した人びとに対して、ときの北海道庁長官から林喜太松に表彰状と木杯が下付された。（略）

* 小嶋つる（当時の苦労を子供心に味わった思い出）談

31年秋の大洪水で収穫は皆無。現金収入の道がないので12才の子どもであった私も

家の助けにと常呂の森本製軸工場の女工として雇われ（ガッチャ振り）、いくらかの賃金を家に入れた。

家の方は、米・味噌など内地から持ってきて若干残っていたものが洪水で流され、アワ・キビ・大根・人参など水害跡に残ったもの、それにオヒョウは畳大のものでも15銭くらいで買えたので、これらの塩汁に麦、キビに甘藍（注：カンランキャベツ）などは鬼皮（注：外側の皮）のまま入れた雑炊か芋とドングリの粉との団子の常食でひと冬を越したが、良く栄養失調にならなかったものだと思う。

『土佐郷土史』からの抜粋・編集

* 高橋仙蔵談

明治31年は作物が全部流されて食べるものがなく、団栗の実を拾ったり、水に浸かって腐れかかったイモを食べました。

11月天皇から片岡侍従を御差遣（さけん 注：公的に使者として差し遣わす）になりました。罹災者は戸長役場前に集まって内帑金（ないどきん 注：天皇の手元にあるお金）をいただきました。侍従は、「食糧がなくて困るだろうが政府が食糧も金も貸すから心配せずにこの土地を離れず辛抱するように」と励ましてくださいました。一同は感激して再起を誓いました。その冬、女の子たちは網走方面に出稼ぎに行き、私どもは食糧や金を借りて次の年の作物がとれるまでしのぎました。ずいぶん苦しかった思い出です。

※『ところ文庫30 常呂川…洪水と治水の歴史』（佐々木覚著 平成26年3月発行）に「北海道毎日新聞」の記事を掲載しているので引用して紹介します。（現代文に編集）

「さる8日午前4時から北見国常呂地方で出水し、常呂川がみなぎりあふれて常呂村に出水し、同植民地は元来低地なため一面に氾濫し、午後11時になって常呂川の増水は1丈8尺（注：約5・4メートル）に及んだ。そのため、出水の当時から分署戸長役場では植民地移民の救助準備に着手し、同日午前6時に救助船6隻で救助に従事し、常呂本村に救助事務所を設け、飲食物の準備を行い、同8時から救助船で飲食物を配布し、かつ避難所を設けて応急の手配をしたが、植民地の水量が5～6尺（注：1・5～1・8メートル）、その水の勢いが激流のため大船を使用できず、概して磯舟のため一度に多数の人を救助することができなかった。そのため、老幼婦女を第一に救助し、10日までに本村および鑑沸村に上陸させた者は124名に及んだ。本村救護事務所まで飲食物を送り届けるなど大変煩雑を極めたが幸いに1名の死傷者もなかったことはこれらの対応が良かったことによる。

植民地99戸の内浸水の難を逃れたのはわずか11戸に過ぎなかった。家屋は幸い流失をまぬがれても全壊同様の状況を示していた。また、人命に以上はなかったとはいえ、馬2頭が行方不明となった。

植え付け作物は暴風水害に遭い、すべて収穫の見込みはなく、甚だしいところは1戸で4町歩に及ぶ。その惨状を極め、救助米を停止することがあれば生活に困難をきたす者も多い。場合によっては嫌気がさして開墾地を捨て帰国を思い立つこともあるので、ていねいに諭し、保護をしなければ食糧が枯渇して貧困に苦しむ人が出てくる」

明治42年5月の洪水

『ところ文庫30 常呂川』(平成26年3発行)から転載・編集

明治42年5月7日から9日にかけて低気圧の通過による降雨と融雪によって大水害に見舞われ、同年5月20日付けの「北海タイムス」によると

「常呂村は常呂川・ライトコロ川は平素より1丈あまり増水し、土佐原野の一部を除く他の川水が氾濫、まったく洋々たる大海に変じ、一時はものすごきありさまなりしが、浸水家屋は手師学全戸数31戸の内27戸、太茶苗53戸全戸、常呂148戸の内92戸、川沿173戸の内168戸、鑑沸405戸の内321戸、総浸水家屋661戸にして、岐阜部落のごときは1丈2尺の増水にて家屋はまったく水底に没し、その被害程度ももって想像に難しからざるが、警察、役場員、有志らの多大なる尽力にて幸いにも人畜に死傷を出さず、ようやく避難せしめたる。(中略)

今回の道路決壊は約8,000間に及び、浸水反別は1,530余町、浸水反別の損害約30,000円に達するならんと。

なお手師学、太茶苗はあるいは流失家屋、人畜死傷者などありとの説あるも交通途絶のため不明なり」とあります。

さらに5月21日付けの「北海タイムス」には水害後報として

「常呂郡常呂村は、土佐原野の一部浸水、幸いに損害少なく、岐阜・川沿のごときは凹地1丈3尺余りに達したる所ありたれども流失家屋及び人畜に死傷なし。浸水家屋は260戸、浸水畑地883町3反5畝歩、損害20,000円に達するならんという。同郡太茶苗村は、今回、水害被害中もっとも甚大にして浸水畑地97町1反1畝歩の内、約半数は2尺くらいに土地の流失あり。ほとんど新墾同様なる荒れ地に変じ、同村53戸全部浸水し、はなはだしきは1丈2尺増水したる箇所あり。流失家屋1、倒屋1。村民はいずれも付近の高地に避難し、ようやく生命だけとりとめたるも、一帯は激流で舟も使えず、中には2日間を絶食したる者あり。浸水6日間にわたり泥水をもって飲料水に用い、フキの根、若草などにて飢餓を癒したる者あり。

常呂郡鑑沸村ライトコロ川及び佐呂間川氾濫のため、浸水家屋321戸、被害反別482町2反8畝歩損害11,000円に上るよし。出水後ただちに学校及び寺院に避難したるため人畜死傷などなし。

手師学村は浸水家屋30戸、被害反別61町3反9畝、損害1,020円余り」とあります。

*注：『岐阜区開基百年記念史』には、「明治42年5月、岐阜地区方面大洪水、22日まで(雪解け水の増水による)」と記載。

明治44年7月の水害

『常呂町百年史』からの抜粋・編集

(略) 明治44年7月19日から降り続いた豪雨による氾濫は、『常呂村史』によると、「にわかには常呂川の増水となり手師学、太茶苗方面より順次下流に氾濫して、土佐団体の一部を除きほとんど浸水し、太茶苗、川沿方面にありては、床上2尺から5尺に及ぶ」とあるが、この天災には、木材の流送とそのための設備が人災として加わり、氾濫による流域住民の被害をいっそう助長したのであった。明治40年代から大正時代にかけて、まだ輸送手段としての林道を含む道路も開かれず、車馬の数も乏しかったころ、道内の河川が運輸に利用されたように、常呂川でも、はるか上流の大雪山系の森林で伐採された丸太材の流送が行われ、河口付近で集積されたのであった。そして流送の効率を高めるために、川を横断して、通称網場（アバ）といわれる堰を築き、満水した水をいっきょに放水、その勢いをもって木材を大量に流し込んだのであった。『常呂村史』によると常呂村5番地にあるサケ・マスふ化場（注：昭和12年当時存在）付近にこのアバがあり、氾濫時に野付牛方面から流送されてきた丸太が約2万石ほど滞積しており、これが川の水位をいっそう高め、溢水を助長した。かくて沿岸の農漁関係の住民からは、はげしくアバの撤去をせよという叫びが高まる一方、木材業者は2万石の木材をむなしくオホーツク海に放流する決心もつかず、村当局と駐在警官も困惑して決断を下せず、結局上級監督庁の指揮を仰ぎ、アバを撤去する非常手段をとったのであった。『村史』によると「両者の対立喧噪を極め一時は事態容易ならざる状況」と暴力沙汰と化した紛争のはげしさが推測されるのである。結局は「農村としても既に莫大の被害を受けつつあるに鑑み要は天災の然らしむる処として互に自重し事なきを得たり」というが、この水害では被害は180,000円に達したのであった。(略)

『ところ文庫30 常呂川…洪水と治水の歴史』

(平成26年3月発行) から抜粋

(略) この木材留場に滞積した木材が川の水位を上げ、洪水を助長しているとして、農民が留場を切って木材を放出せよと要求しましたが、木材業者は木材放出を阻止せんとして睨み合いになりました。中に立つ戸長や巡査は本庁に伺いを立てましたが、そのうち農民側は多くの応援を得て警察の指示を待って木材を止めてあったワイヤーロープを切断してしまいました。そのため木材は海に流れ出て、木材業者は数万円の被害を受けたとしています。また、留場を撤去して減水したのは僅かに3寸に過ぎなかったともいわれており、農家の被害もさほど甚大なものではなかったようで『北海タイムス』には「かくの如き増水は殆ど毎年ある所にて去年の如くは約8尺の増水を見たり」とありました。

大正8年9月の大水害

『常呂町百年史』掲載の『常呂村史』からの抜粋文を現代文に編集

(略) 9月19日から降り出した雨は、刻々と増大して暴風雨となり22日まで降り続いた。特に常呂川上流地方の雨量は意外に多かったため出水が早く、村内においては22日午後4時頃に手師学部落で氾濫し、豪雨とともに夜間になったため惨状は悲惨を極めた。濁流は駆け走るように常呂川からあふれ出し、その水の勢いが激しく耕地を洗い民家を倒壊させた。住民は家具の片付けをする暇もなく、山あるいは高台を目指して避難したが、中には不幸にも逃げ遅れて溺死する人もいた。

手師学方面で氾濫した濁流は次第に流下して午前0時頃太茶苗方面でも氾濫した。常呂川の蛇行がはなはだしい所は流れが悪く、浸水が身の丈になった太茶苗部落約60戸の大半は押し流され、中には下常呂原野まで流失した家もあった。

翌23日午前10時頃になって泥流はついに下常呂原野でも氾濫した。その日は前日までの雨天も回復し、晴天となっていたため住民は出水を予想せず、被害が甚大となった。

当日、村には上流地の野付牛方面から出水したとの電報を受け、午前10時に警鐘を乱打して消防の出動を求めて警戒に当たる一方、馬を走らせて部落の状況を視察し、舟を漕がせて救助を準備中に正午頃17号、12号付近の堤防が決壊。その水の勢いは極めて猛烈でライトコロ川に突入し、川沿方面はもちろん岐阜部落も浸水して釜沸に流れ下るが水量が増大して流れが悪く、刻々と増水して波を立てながら旋回し土佐部落に激しく流れこみ、3号の低地付近から次第に常呂川に流れこんだ。

堤防の決壊によりまたたく間に下常呂原野全体が湖のようになったことは、いかに水の勢いが猛烈だったかが想像できる。ことさら当日は天候が回復し、誰もこのような惨事を予知せず、家具の片付けはもちろん、一粒の雑穀の持ち出しさえする余裕もなく、身一つで避難または救助隊の舟に収容される者も多数いた。

浸水は24日正午からようやく減少し、浸水が収まってから避難民全員が復帰したのは28日で6日間という長期にわたった。

村は即刻元郵便局の建物を救助本部として救助隊を組織し、要所には公職者を配置した。避難所は市街地付近は公会堂、部落には浸水しなかった家屋を借り上げ罹災した人たちを収容した。市街地では各戸から炊き出しを行い、篤志家の寄贈品を受け、不十分ながらも衣食に窮しないよう努めた。この大洪水の被害は皇室にまで届き、罹災者の救援金として金500円の御下賜があり、罹災者はもちろん村民一同感激した。さらに一般の人たちは金600円の義捐金と多数の物品を拠出し、隣保共助の精神を発揮した。(略)

『土佐郷土史』掲載の文を抜粋・編集

9月19日から22日まで降り続いた豪雨により、常呂川の濁流は23日明け方には手師学部落で氾濫して戸数の大半を押し流し、午前10時頃には川沿全域を襲った。雨はすでに収まり天気は回復している青空の下で水量は刻々と増大し、次第に土佐部落も浸水し始めた。

当時、常呂川上流奥地には巨木が密生して雨水を一時的に支えていたから、下流で出水するのはいつも雨がやんで10数時間後ないしは1日も経ってからのことであった。

この時、土佐部落の戸数23戸、耕作面積145町6反、その大半はエン麦で62町7反に及び、大小裸麦類がこれに次いで36町、豆類が30町、その他10町であったが、全耕作面積の約50パーセントが水びたしとなり、まだほとんど脱穀していなかった作物は刈ったままか積んだまま、あるいは根こそぎ常呂川とライトコロ川に押し流されていったため、収穫は皆無に近かった。

水かさは3尺から4尺に及び、高波は轟音を伴って狂流し、たちまち2号（水門）あたりから3号付近に滞留し、堀口辰雄の屋敷だけを残すだけで、あたり一面泥海に変わった。一方、5号付近から西1線の小原安馬宅の裏にまわった水は小島宅の裏山を洗ってライトコロ川に流れこんだ。泥水は次第に部落内あちらこちらの窪地にまわって滞留した。浸水屋敷の前後を低地に囲まれていた小原廣、内藤惣太郎の両家はたちまち濁り水の中に孤立状態で残され、一時は家族の生命の危険にさらされるにいたった。

雨上がりに安心していた上川沿、下川沿の人びとは思いがけない急激な浸水に家財道具を持ち出す余裕はまったくなく、わずかに身一つで近くのイワケシュ山や川東の山に避難した。土佐3号からは村の消防団員が磯舟で食糧の補給など救護にあたった。浸水は翌日正午頃からようやく減退したが、これら避難民全部が復帰できたのは28日頃であったという。

『豊川区開基百年記念誌 ふるさと』掲載の文を抜粋・編集

（略）9月19日から台風の通過にともない降り始めた雨が22日まで続き、大雨となった。翌23日には雨も上がり、晴天となったが、上流から増水していた濁流が10時頃から常呂原野一帯に押し寄せ、12号と17号にわずかに造られていた小さな堤防もたちまち押し流され、畑一面が泥水に覆われ未曾有の大洪水となった。この洪水による常呂村の被害は、罹災戸数392戸、流失住宅43戸、溺死者1名、溺死馬16頭と記録されており、村内の半数近い戸数が被害を受けるという大洪水となった。

このため、せっかく掘削した大排水も無と化してしまい、全ての農産物も収穫皆無となり、たび重なる洪水・凶作に疲れ、負債も増加したため耕地を売り渡して離農・転出する部落民は日ごとに増え、開拓以来築いてきた畑も湿原地となってしまふ所が多かった。

（略）

『共立百年史』掲載の文を抜粋

（略）下川沿においては齊藤友左衛門氏が消防団の陣頭に立ち、孤立した農家の救援に当たり、旧常呂劇場（注：公会堂の間違い。常呂劇場の完成は昭和11年）に避難させ、村当局もこれに当たった。当時の住居はほとんどが掘っ立て小屋で、水が浸水し、小屋はつぶれ、屋根が開いてつぶれ水面に浮かび、その上に人が乗り助けを求めながら流されたそうで、上川沿の人たちも数戸流されたそうである。この時の水の深さは共立の安藤英一宅付近では屋根の軒下までの深さに達したそうである。（略）

『ところ文庫30 常呂川…洪水と治水の歴史』掲載の
「北海タイムス」を抜粋・現代文に編集

10月1日付「北海タイムス」

「常呂村からの詳しい報告では22日午後7時、野付牛水量観測所北原氏から常呂川増水199寸（注：約6メートル）で、なお増水のもよとの電報が役場に着き、大柿村長は村会議員と共に市街有志を訪問して協議したが、199寸の増水を信じる者はなく電報の間違いだらうと言う者もいたが、救助出動準備をすることに決め、炊き出しを行い、未明（注：23日）から消防を繰り出したものの既に刻々と増水して12号、17号堤防が決壊した。危険との電報を受けて常呂川に接する岐阜部落に急報した時には路上3尺（注：約91センチメートル）の浸水で、午後2時には岐阜と川沿、常呂村全村が一面の大海と変わり、悲鳴を上げる者、救助を求める者、右往左往しながら避難する者など阿鼻叫喚の修羅場を演じ、救助隊の消防・有志・青年会会員らは危険を冒して馬を逆流の中に入れ、流れを切って救助する者もいれば、舟数隻で救助する者もいた。さながら船合戦の状況のようで文章で表すところではない。渦となった流れと共に農作物は流失して大海に漂った。

ようやく27ヶ所の救護事務所を設け炊き出しを行い、いっときの急場を救ったが、罹災民は急な増水のために何一つ持ち出せず、身一つで逃れたためシャツ1枚の者もいた。有志による衣類その他の寄贈があったが、今回の水害は明治31年の水害以上の被害であり、誰も彼も途方に暮れている。

浸水家屋385戸、手師学では21歳の婦人が濁流に巻き込まれ非業の最期を遂げ、馬6頭、流失家屋6戸、納屋及び小屋76棟。

太茶苗部落は馬10頭、流失家屋12戸、小屋及び納屋43棟。

常呂本村は馬4頭、流失家屋5戸、納屋小屋などはほとんど全滅。

今なお交通が途絶しているので調査不明の箇所は常呂川左岸の幌内・太茶苗・手師学だが、いずれも低地のため全滅しているかもしれない。

農作物は全部流失、腐敗したため罹災民は食糧が1粒もなく、暖を取るにも薪1本ない。寝具・道具などを全部流失してしまった者は今日までの調査で235戸に達し、村長をはじめ有志も手の施しようもなく、ただ共に涙に暮れているほかなし」

「大正8年の水害」 内海アサ子

常呂町高齢者教室『昭和58年度オホーツク大学文集 トーコロ』掲載

（略）大正8年、その年は大変に作物が良くできた。9月の秋祭りが近づいた頃、突然大雨が降り続き、3日3晩も降り続いた。翌日はからりと晴れ、やれやれの思いで朝を迎えた。その時、遠くの方でゴラゴラという物音、続いて人々の叫び声です。「水害だ、水害だ」。耳を疑って聞きましたが、ごうごう音はますます大きく、ただならぬようすにあわてふためき、家財道具を片付ける間もなく、水はすぐそこまで押し寄せているのです。父は私と妹を押し入れの棚の上に乗せ、必至の動きもむなしく、まとめた物も水の中に落ちたり、もう床の上まで水浸しでした。夕方、私たちは丸木舟に乗せられ避難しました。

こうして8年の水害の後、12年まで毎年水害が続き、人々は大きく動揺したのは無理ありません。

「私の思い出」 沢向福松

沢向福松さんは、大正5年3月に胆振国浜厚真から常呂村蠣島
(注：栄浦)に移住。

常呂町高齢者教室「昭和59年度オホーツク大学文集 トーコロ」に 大正8年の水害に関する記述部分を抜粋

(略)大正8年には大水害があり、私の親父の仲の良い友だちが青豆を流れから上げてくれと言われて、畑の中を川崎船で、帆掛け船で走ったこともありました。そこは海のとうでした。豚やニワトリが流されてくるのを見ると、農家の人にはお気の毒なものです。

「昔の思い出、現代感想」 大江俊良

常呂町高齢者教室「昭和60年度オホーツク大学文集 トーコロ」 大正8年の水害に関する記述部分を抜粋

(略)私の生まれは旧太茶苗、現在は日吉地区になっております。

大正8年の思い出は、忘れることもできない大洪水でした。

その当時、私は小学校1年生で、畑に出した根木(注：掘り起こした木の根)がどんどん流れ、家にぶつかり、流木が当たるたびにみしみしきしむ家の音、水の圧力と流木に負けて押し流される家も次から次へとあり、屋根の上で一家がしっかりつかまっていたのです。

高台の人らが丸木舟で助けに来てようやく山の手避難することができました。

わずかな食糧だったので、流れて来るカボチャなどで間に合わせたものです。

当時の食生活は裸麦とキビ、イモ、トウモロコシ、カボチャ、食用油はエゴマをすって油代わり、味噌は自分たちの手作りでした。

続いて9年にまた水害、11年と水害連続でした。水を含んだ麦俵はだるまのように丸くなり、俵に指が入らないくらいカチンカチンに堅く、それをそのままでは芽が出てしまうので、大きなハッカ蒸留に使う釜で炒り、それを焼いて食べたものです。それでも食物不足なので手亡(注：インゲン豆)を買ってご飯の中に入れて食べもしました。(略)

「私の少年・青年時代」 関谷昌二

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和62年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

(略)大正8年の秋は大水害があり、人びとの「水が出るぞー」という声に、着物や大事なものを2階に上げ、終わった時にゴーという音で外を見ると、6尺くらいの高さで水が向かってくるので、急いで屋根に登り命が助かったそうです。しかし、作物は全部流され、着物は泥水で真っ黒になり、岐阜県に帰ることもできず、親たちは途方に暮れました。ようやく鑑沸の人の舟で高台に上がり、皆さまのお世話になったようです。

*注：関谷さんの家は、現在の岐阜地区西5線9号

「常呂の開拓について」 奥泉勝雄

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和63年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

(略) 大正8年の洪水は記録的にも水位は最高位でした。私の家は高台地で家には水害の被害はない所(注:太茶苗27号、現在の日吉)なので、水害のあるたびに付近の方々が来ました。約12~13軒の方々が助けてくれということで先に馬と子どもたちを避難に連れてきて、すぐに自宅に戻り農機具及び家財を片付けているうちに増水して歩くことも不可能になり、自宅の梁または屋根に登って助けてくれと叫び、救助舟を求めて舟が来るのを待ち、そのうちに舟が来て次々と私の家に避難して来たものです。(略)

「私の人生ところどころ」 鈴木正

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和63年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

(略) 大正8年…私は数え年7才でした。3日3晩、滝のように降り続く雨は一拳に常呂川をあふれ、夕方薄暗くなって激しく降る雨と共に、山と山との間は濁流の渦と化しました。父はあわてて私たちを天井裏に上げ、大事な馬を高いところに移して水びたしになって帰ってきました。

畑も野原も道路も飲み込んだ濁流は農作物を流し、家を流し、逃げ場を失った人びとが流れる屋根の上で助けを呼ぶ声は「おーい、助けてくれー」と何度も叫ぶ声は、闇を通して遠くから段々と近くなり、次第に遠くなっていきました。

天井裏にいる私たちもいつ流れるかわからぬ状態なのでどうすることもできず、じっと闇の中を見つめて涙と共に寒々とした気持ちでした。

私の家から150メートルくらいのところにアカダモの太さ80センチ、高さ6メートルくらいの枯れ木に猫が流れ着き、一晩中高い声で鳴き続け、濁流の水音と共に不気味な恐ろしさを感じました。

明けて屋根の上に出てみれば、一面の濁流にはゴミと流木、農産物は麦類と青エンドウ、カボチャやスイカなども流れていきました。時にはアオダイショウという大きなヘビも泳いで流れていきました。

段々腹も減ってきました。母が、天井裏に上がる時イナキビのご飯を炊いたままストーブの上にかけてままだったことに気がつき、父が長い棒の先にカギを付けて水の中を探して吊り上げ、1日目はやっと空腹を満たしました。夜になっても水は少しも減ってきません。父母が側にいる私たちは恐ろしさも寂しさもあまり感じませんでした。

次の日も濁流とゴミの流れを見ていると、アイヌの吉村ラクトクスという人と当時の青年団長の山本政次郎さんが丸木舟でにぎりめしとたくあんの切ったのを人数に応じた数を置いていってくれました。

3日目は水も段々減ってきて水の流れもゆるくなり、夕方には高いところが水面に出てきました。

4日目の朝、目を覚ましたら水はほとんどありませんでした。低いところに流れているだけでした。水の引いた跡は泥の海で、家の中も家財道具も泥だらけで飲み水もありませんでしたから、父や母は私たち子どもの飲食にはよほど苦労したことと思います。挽いた麦が青く色の付いたものや芽を出した青エンドウなども食べました。

外米も買って食べました。ご飯を炊く時に変な匂いがしました。できあがった時は真っ白な米のご飯なので期待をはずませ、いざ食べてみると麦のご飯の方がおいしかった。
(略)

「自分史」 大江俊良

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和63年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

私は大正2年4月1日、常呂村太茶苗(福山)部落に生まれました。太茶苗の土地は沖積肥沃な良い土地でした。学校は太茶苗小学校で生徒は60余人でした。

が、恵まれた原野にもこんな災害があろうとは…。それは大正8年の大水害でした。

私は小学校1年生で、隣の家が新築したてなので、お婆さんと2人で隣の家避難しました。私は、夕暮れの雨が降る中を父母もすぐ隣へ来るのではと思いました。それが後で分かったことでしたが、水が速く、深く、もう家から隣まで来れなくなっていたとは。

次の朝、外を見ると驚きました。濁り水がいっぱい、それに切り倒した木がどんどん流出し、家の前に木が集まって、それに押されて家が軋みだしたのです。

それとは知らず、地震だ地震だという橋場さんの声がしましたが、地震ではなく、家が流されていたのです。家は約20メートルほど流され、木の切り株で止まったのでした。そのことは後で見て分かったことです。(略)

『常呂村当直日誌』から判読可能該当箇所を抜粋(現代文に編集)

9月22日(月) 雨風強い

数日来の降雨のため、常呂川取水したので予防準備に着手

9月23日(火) 暴風雨、午前5時頃からようやく晴れ

数日来の降雨のため、常呂川の出水が甚だしい。川沿部落に被害があるようなので午前5時に警鐘を打って消防を召集し、村長以下各吏員が午前6時に常呂橋に集合し、舟を遡行させて各部落の罹災民の救助に努める。

午後2時から罹災救護仮事務所を公会堂に設ける。

午後11時まで消防員、有志、局長、巡查部長巡查と協力して救護に従事する。(略)

9月24日(水) 時々降雨、午後曇り

前日に引き続き水難救護仮事務所協議。各所と手分けして分担しながら救護事務に従事する。

正午頃からようやく減水。常呂橋橋脚石垣が破損、中央切断低下する。(略)

消防職員、公職者、有志、局長、巡查部長らは当日も救護に努力、炊き出しも同様。

収容人員44名増加。

9月25日(木) 晴天

村長、収入役は救護事務所に詰めて救護事務に従事する。

午後0時から郵便局で市外在住の公職者を招集して協議会開催、村長、収入役出席。

左記の件協議。

- 常呂橋出水のため交通危険の状態につき通行者に対する処理
- 被害者救済案
- 災害の善後策

9月26日（金）雨天

被害状況として網走支庁から2名来て調査。

午後1時から郵便局で市街公職者及び16名の集会の上、左記の件協議。

- 救済会組織
- 救済実施の準備として村内全部にわたり各戸を敏速に調査をすること

大正9年8月の水害

『豊川区開基百年記念誌』掲載・抜粋

(略) 大正8年は年間を通じて8回の大洪水に見舞われて農作物は収穫皆無のうえ、常呂原野の居住が困難となった。

このために、耕地を売り渡して離農、転出する部落民は日ごとに増加し、開拓以来、今日まで天塩にかけて作り上げてきた農地も葦原が密生する湿原地帯と化し、将来の農業経営に暗い影をさらけ出してきたのである。

1俵価格 大豆：9円 小豆：11円 エンドウ豆：1円40銭 でん粉：14円
豆の大暴落と大水害の被害により大打撃を受けた。

大正9年

荒廃した農地はどこもかしこも葦の伸びほうだいとなり、鴨が飛び交い、せり積み場となった。しかし、排水工事は遅々として進まず、道庁直接工事としての働きかけを強めた。

8月10日から18日にかけて洪水が起こり、昨年の追い打ちの被害となり、この年は春から合計9回の水害に襲われた。

「83年の思い出」(抜粋) 城石およき

(略) 大正9年9回、大正11年は大洪水で、たび重なる洪水で生活に困り、父は治水工事の出面に出て働いていました。(略)

「思い出」(抜粋) 江田由蔵

(略) 私が北見に来たのは大正8年8月3月2日です。それは現在の共立川東、得川様のおられる土地です。そして耕作面積は5町歩です。(略)

1年暮らして大正9年は、春から秋まで1年に9回も水が付き、春蒔き小麦、エン麦、亜麻、エンドウ、豆類、そばなどを蒔き付けしておりましたが、従って生活に困り、冬になって能取の山に働きに行きました。(略) 大正9年は春から雨降りが多くて、1年で9回の水害に遭いまして、実に生活に困りました。(略)

『豊川区開基百年記念誌』座談会に掲載

『常呂町百年史』掲載「第3節 常呂川の氾濫と治水」から抜粋

(略) 大正9年8月10日から18日まで、まるで追い打ちをかけるように洪水が起こり、農作物被害175町5反、285,730円、浸水家屋184戸、所有物被害2,680円、堤防決壊30ヶ所延長220間、被害6,000、道路破損4ヶ所延長20間、被害300円、橋梁流失4ヶ所延長14間、被害総額計308,630円を生じたのであった。(略)

大正11年8月の大洪水

『常呂町岐阜部落開基80周年記念誌』からの抜粋・編集

(略)大正11年、築堤工事着工以来、イワケシュ山麓を起点とする313間、また14号付近及び9号近くを起点とする3ヶ所の工事は順調に進捗してきた。

この工事と治水を祈念して聖徳太子像を建立している。

(注：大正11年6月15日 共立川東に聖徳太子碑建立)

しかし、物事は決して人びとが願うように進まないのが世の常である。

夏季に入るとしばしば出水して工事は難航を思わせたが、ついに8月23日は開拓史上最大の大洪水となったのである。上流からの濁り水とともに巨大な数知れない流木が農作物はもちろんのこと、多くの民家まで滝のごとく流し去ってしまった。

当時の悲惨な姿を古老の話から再現してみよう。

17号の堤防は見る間に破られ、14号の河川上橋(トロ引き鉄路)の切断など、特に13号周辺の部落民には大きな損害を与える大惨事となったのである。

この日、23日は好天の日和であり、住民のすべてが昨日の雨降りが止み、ほっとしていた時、突然役場から緊急避難するよう通報が入った。しかし、人びとの多くは急に信じることでもできず、通報の指示通り避難する者は僅少だったという。

(注：「常呂村当直日誌」から抜粋)

8月24日 木曜日 午前6時頃より降雨、暴風、終日豪雨

連日降雨のため、常呂川出水のもようあり。なお、農事試験所北見支部長より常呂川出水、水害の恐れある旨、午後2時5分電信電報あり。ただちに各部落に到達する。

村長は右電報到着につき、治水事務所に打合せとして外出する。)

その後、情報は刻々と入ってきたが、正午過ぎになって事態はますます悪化してきた。この時になって住民の多くは家の周りを整理する者、築堤警備に走る者など部落全体に慌ただしい緊張がみなぎってきた。

夕刻になって17号堤防決壊、14号鉄橋路切断の悲報が飛んだ。民家は泥流と共にどンドン流されていく。ある者は屋根につかまったまま流され、助けを求める叫び声だけがしだいに遠ざかっていく。不安と悲しみに包まれ、離ればなれになった家族を互いに捜し求める声が、夜の更けるまで荒れ狂う常呂川周辺をこだましていたという。

明けて24日の朝は泥水もおさまり、人びとは一応安心したが、寺(注：高德寺)をはじめ、森本商店は跡形もなく流失、民家数戸もその面影なく流されていた。

25日、当時太茶苗にあった岡崎重吉の家屋も上流から流されてきて、10号の防風林に止まったが、わずかな衣類を見つけ出すにすぎなかったという。(略)

『聖徳太子碑70周年記念誌』からの抜粋・編集

(略) 大正11年に入っても築堤工事は着々と進んだが、同年8月24日～25日にまた大洪水に見舞われ、大きな被害を被った。

この時の洪水位は、下常呂原野15号水測所で平水位7.95メートルのところ、9.6メートルにもなったことから14号線新水路付近の築堤盛り土10,494立方メートルを流失するという事態を招いた。このため当初計画の堤防が陳情の結果、0.9メートルかさ上げされることになった。

この水害で多くの農作物を流失し、収入の道を断たれた流域住民が治水工事で働くことになった。村の理事者も治水事務所に就労方を要請していたので、一種の救農土木工事の役割を果たし、工事は順調に進んだ。(略)

14号新水路掘削工事で若い頃働いていたことのある地元の江田由蔵は、当時を回顧して次のように語っている。

21歳の時働き始めた(略)…大正11年8月の大水害では、私の家も床上1.2メートルまで水が付き、家財全部を流してしまった。当時、小麦、エン麦、エンドウを主に作付けしていたが収穫は皆無であり、そこで農家の者はみんな治水の現場で働かせてもらった。自分たちの田畑を守ってもらう堤防造りで働かせてもらい、賃金ももらえるのだから治水様々といったところであった。下常呂原野が今日あるのは、この堤防のおかげだ。(略)

『豊川区開基百年記念誌 ふるさと』からの抜粋

(略) 8月下旬天候不順となり、24日、25日と台風通過の影響で、網走では270ミリ、北見では240ミリの大雨が降り、開拓史上最大の大洪水に見舞われた。建設中の堤防も濁流と巨大な流木に襲われ17号付近、13号付近とたちまち破られ、農作物はもちろんのこと、数多くの民家や14号の川に架けられていたトロ引き用の橋も流されるなどの大被害となった。特に13号付近の部落民には大きな損害を与え、高德寺をはじめ森本商店などは跡形もなく流され、太茶苗から流された家が10号の防風林にひっかかって止まるという被害は、いまだ語りぐさとなり伝説化している。(略)

『豊川区開基百年記念誌 ふるさと』収録「座談会 川沿百年を語る」から抜粋

* 江田由蔵氏が書いた「思い出」を江田隆甫氏が紹介

(略) 大正11年8月23日に、また大水害となり、豊川で7戸が流されました。森本商店、谷川さん、村岡蹄鉄屋、栗林旅館などで、その日の夕方暗くなってからでした。私も水が家につくというので家を片付けて川沿校に向けて逃げ出したのですが、川沿校に着くと暗くなっていました。

学校に着いて静かに聞いてみると、遠い方向で流れ行く家の屋根に乗って助けを呼ぶ声は、今なお耳に残っているようです。

8月24日、学校から自宅に帰ってみると驚きばかりです。自家用にする薪は1本残らず全部流されてしまい、家に入ってみれば家財道具全部污水に浸かって何もなくなり、米も麦もなく、川から上がったような丸裸となり、川から上がったのだと思い、今度はガンバルしかないと思いました。(略)

* この座談会では関連する発言が数ヶ所あるので抜粋して紹介

司会：先ほどの江田さんの資料の中で、何戸もの家が流されたという水害の時は、14号

にトロッコのレールを複線（注：堤防工事用のもの）にしてあり、それにゴミがつかえてダムのようになり、その一部が切れて鉄砲水になったという話で、今でも14号真向かいにその時の橋の杭があるはず…。(略)

司会：13号の沼の話だけれど、これからの将来を考えた時には、これからの人にはちょっと頭に入れておいた方が良くと思う。13号の沼は水が行ったり来たりするんだよね。あそこの下はバラスらしいから、一昨年の水害の時も堤防の水位が上がったら沼の水位も上がった。

諸岡：私が区長をしていた時、町の方に話したら、すぐに開発局が調査に来てボーリングしたら下はバラスなのでどうにもならないらしく堤防の補強工事をした。(略)

『富丘百年史』掲載の「大正11年の大水害」部分を抜粋 安藤浅次郎

(略)大正11年の大水害で、安藤浅次郎は低台につないでいた馬を連れに行き、突然大木が津波のごとく押し寄せて来るのを見て、馬を放し、自分は大木に上って助かった。その馬は岐阜部落まで流され死んでいた。堀田亀太郎が入植した大正12年には、ライトコロ川沿いのくぼみに水害で死んだ馬の骨がよく見られたそうです。相次ぐ水害で離農した人や高台に移住した人もいた。

「私のあゆんだ道」 梅田キヌエ

常呂町高齢者大学「昭和59年度オホーツク大学文集 トーコロ」

大正11年の水害に関する記述部分を抜粋

私は明治42年、洞爺湖のほとりに生まれ育ち、12才の時に常呂村太茶苗、今の福山に來ました。

父は水田作りを目指してきたのですが、当時は水害の多い所でした。

大正11年に大水害があって、家もろとも全部流された。私らは丸木舟に乗って山に逃げた。着の身着のままでした。

『ところ文庫30 常呂川…洪水と治水の歴史』(平成26年3月発行) から抜粋

*「北海タイムス」の記事を2本掲載しているので抜粋して紹介(現代文に編集)

8月29日付「北海タイムス」

「昨日から増水し、官民あわせて防水に務めたが狂暴な水の勢いは途方もなく、15号、14号築堤が決壊、11号以下下流の両岸は浸水し、原野一面は大海のよう。太茶苗市街は全部浸水しているようであるが連絡が取れない。床上浸水家屋は300戸以上の見込み。畑地の被害は2,000町歩以上。大正8年の水害よりも被害が多い。これらの被害者は公会堂と小学校に収容しているが、なお増水中」

*9月20日付「北海タイムス」

「出水は明治31年の水量よりも大きく、39尺5寸という未曾有の出水だった。常呂村全体(太茶苗・手師学・川東・幌内・岐阜・川沿・土佐)の各原野を襲い、農作物

はほとんど全滅状態で流失、または泥土に覆われ、わずかに高台の一部に青苗が見えるにすぎない。2, 838町歩の作付けに対して2, 124町歩の被害地が生じている。浸水家屋は315戸で、床上6尺以上が110戸、4尺以上が112戸、2尺以上が28戸あるのを見てもいかに被害が甚大だったかが察せられる。流失家屋は31戸、住家21戸、非住家10棟、流失物件は家具865点、農具1, 350点、衣類1, 874点、食料品15, 320点、その他1, 330点を流失し、橋梁の流失7ヶ所、破損5ヶ所、道路の欠損破損被害は七千円、堤防治水工事を除き十六ヶ所、避難所二十二ヶ所、避難者1, 750人、農作損害446, 626円、その他11万5, 350円、総計56万1, 976円。(中略) 常呂は市街地の住民を除く農民のほとんど全部が被害をこうむっている。ことに常呂村は10年もの長期間にわたり天災地変に遭い、息を継ぐ間もなく不幸続きの村で、いっそう同情を禁じ得ない。この大水害に死傷者を一人も出さなかったのは24日の午後2時農事試験場から水害の報告があったその時はわずかに3~4寸の増水に過ぎなかったけれども、早くも全村に避難の準備を伝えた」

「昭和7年の雨乞い 豊川地区編」(抜粋)

『イワケシュ郷土史』(昭和49年2月発行) 掲載

(略) 昭和7年は、まさに日照りに悩まされた年であった。この年は、春以来の良い天気に恵まれて作物の生育は極めて順調であり、加えて農作業も手順良くはかどり、農民にとっては先の見通しが明るかった。ところが、春も中頃から雨らしい雨はさっぱり降らず、畑も風が吹けば土ぼこりが舞い上がり、草取りをすればあたかも灰の中をかき回すような状態であり、作物ばかりではなく野道の草も生気を失い、人畜草木にいたるまでしおれてしまうような姿を迎えたのであった。

ことここにたって、時の村長佐藤満三(注：昭和7年6月4日 興部村書記から常呂村村長に発令「当直日誌」)は、各部落へ雨乞いをするよう指示をした。川沿の区長岡崎重吉も真剣になって部落民へ呼びかけたのである。部落農民一同も日照りとはいえ、毎日の好天気続きのため農作業も予定以上にはかどっていたので、某日の昼さなかに巖地神社へ集合し、宮司三角武を迎えて祈禱を始めた。

一同うやうやしく真心を込めて3回ほど祈った。しかし、残念ながら神の御利益はさっぱり現れるようすも見られない。やがて、人々も本気で神を拝み祈る者、冗談を言い合う者など乱れが見えてきた。そのうちに拝殿を出て外で青空を見上げながら大声で「西の山から雲がぶっ立った。西の山から雲がぶっ立った」とさけぶ者もあったが、その効果はさっぱりなかった。

神社での雨乞いをあきらめた部落民一同はイワケシュ山に雨乞いをすることに作戦を転換し、6月27日の吉日を選んで登山を開始した。やがて山頂に着いた一団は、大工伊藤正治が木を切って作った鳥居の前に祭壇らしい形を設け、佐藤竹次郎が宮司役を引き受けて、心からイワケシュ山の神に向かって雨乞いをしたのである。神は無情にもその日は期待の雨雲は見ることができず、遠く網走湖、能取湖、佐呂間湖を眺めるだけで下山した。何としてもあきらめることのできない部落民一同は相談の結果、各隣組ごとに当番制にして毎晩登山をして雨乞い祈禱をすることにした。7月2日になって、ようやく少量の雨が降ったが作物にとっては焼け石に水である。しかし部落民にとっては神の靈験あらたかなるものとしてその後も一生懸命代わる代わる登山をして祈禱を続けた。

やがて、7月13日になって10時頃、待ちに待った雨が西の山から降ってきた。部落の各農家は小躍りして「降った、降った、雨が降ったぞ」と喜びにわいたものである。

ところが、とかく世の中は思うようにいかないもので、いったん降り始めた雨は、今度は止むを知らないごとく来る日も来る日も降り続いて、ついに思わざる常呂川の水害となって現れたのである。裸麦、小麦、えん麦などの主要作物は畑の中で水に覆われ、水が引いた後も病害に犯され、豆類も含めて収穫皆無という状態を迎えるにいたった。生活も打ち続く不景気と凶作のため、極度に苦しくなり、部落にとっては苦しい試練の時であったといえよう。(略)

(注：7月 大干ばつ後に長雨続き、凶作 「岐阜百年記念史」)

「雨乞いの話」

『豊川区開基百年記念誌』（座談会から抜粋）

江田：昭和7年には干ばつに悩まされて、雨乞いをしたという記録が残っているんだけど。

諸岡：その当時、それぞれみんな井戸を掘っていたでしょう。その井戸水も干ばつでなくなると川から水を汲んでいた。不便なので会合を開いた時に、内地では干ばつの時、雨乞いをして、そのおかげで恵みの雨が降ることがあるという話が出て、それを実行するために部落で班編制をして山に登った。6月30日は寒かったので、お互いに焼酎を持って登ったんだ。可児さんの方から登ると城石、東さんの山を通って登る道があった。そして福山にいた佐藤米松さんが神主役で登った。

近藤：昔、神社当番とか馬頭観音の当番が頼んだのか、それともたまたま来たのか、俺が拝んでやるというって、よく拝んでもらったことがある。

清尾：雨乞いに参加したのは、この中では諸岡さんだけですか？

諸岡：俺だけだな。

近藤：俺は赤ん坊の頃だからね。

佐々木：雨乞いというのは、日中かなり暇を費やして行ったんだろうけど、本当に降るといふ考え方はどのくらいあったんだろうね。

司会：わらをもつかむという心境で、いよいよ困り果ててそうしたのではないかね。

諸岡：4部落の人が交替に手分けしてやったらしいね。

佐々木：願いが天まで届け、という思いだったんだろうね。

諸岡：昭和7年7月1日が川沿校の運動会だったんだ。我々が朝、山から下りる時に下を見たら霜で真っ白さ。そして、昼頃になると手亡（注：白いんげん豆）、小豆、野菜類がみな真っ黒になっちゃって大凶作さ。そして、その月の三日から雨が降って、それがまた毎日毎日降るものだから大洪水になってしまったんだ。

佐々木：そうしたら、効果があったんだなあー。

全員：ワッハッハッハー。

宮岡：効いたんだね。

諸岡：この時の大雨は、ライトコロ川から岐阜にかけて水に浸かったんだ。そして常呂川も水害になり、せっかく作った作物は流され、それで懲りて雨乞いをやらなくなったんだ。

佐々木：それから今までは、それほどの干ばつはなかったのかい？

諸岡：いや、あったけど、昭和7年の大雨に懲りて雨乞いはやらなくなったんです。

可児：また降られて洪水になったら困るからなあ。（略）

「昭和7年の雨乞い 富丘地区編」(抜粋)

『イワケシュ郷土史』(昭和49年2月発行) 掲載

(略) 富丘とは切っても切れないイワケシュ山の雨乞いについて述べる。豊川部落の記録と併せて当時の生活を偲んでいただきたい。

昭和5年は天候にも恵まれ水稲、豆類の大豊作の年であった。ところが次の6年はうってかわり冷害凶作の年であり、水稲は収穫皆無、畑作物も甚大な被害を受けたのである。

7年の前半は蒔き付け以降好天続きで一時は豊作も期待されたが、その後、雨らしい雨は降ることなく、やがて頼みの入梅も空梅雨に終わり、農家一同は等しく天を仰ぎ、干天に慈雨のくることを心から念ずる毎日を迎えるようになった。

農作物は極度の水分不足のため青色を失い、まさに枯死寸前の様相を示すありさまで、やがて誰が言うともなくイワケシュ山へ登って雨乞いをしてはということになった。この声は部落に高まり、各部落の衆議もまとまって上川沿、下川沿、西川沿3部落から幾人かかずつ班編成のうえ、毎日交代でイワケシュ山へ登って雨乞いの儀式を行ったのである。

ある日のこと、西川沿部落(注:富丘のこと。大正11年に上川沿から分離・独立)から当番である幾人かの人々が山に登った。福山部落に居住する通称佐藤米松神主は、一本歯の下駄で山頂まで登り、人びとを驚かせたものである。いよいよ頂上に達してその日の雨乞いの儀式に入った。

まず下川沿部落の一人である萩野勝太郎は、神主に向かって曰く「どうか雨を降らせてください。お願いします。雨を降らせて下さい」、神主曰く「ソチヤ何オニナルノウ」「オオオになります」「雨ゴイニ来ルニ、ミノ笠モ持タズトハ何事ナルゾ」「誠に申し訳ございません。お許してください。お許してください」と、笑うに笑えない2人のやりとりがあったという。

やがて7月1日となり、その日は例年の川沿小学校の運動会も無事盛大に終了した。閉会式のあいさつで清水友市校長は、「運動会も終了しました。願わくばこの後雨がほしいものです」の言葉を最終に添えたのである。このあいさつと願いが天に通じたのかどうか知るよしもないが、7月2日の朝から降り出した雨は、毎日のように止むことを忘れたかのように続いたという。とかく世の中はまならぬというが、その後は雨天と曇天の毎日で、ついには前年に次ぐ凶作の年になったという。

これ以降、例年、どんな干天が続いても部落民の中から雨乞いの話は出なくなったという。(略)

「私の少年・青年時代」(抜粋)

昭和12年 吹雪の中での湧網線列車大事故

常呂町高齢者教室「昭和62年度オホーツク大学文集トーコロ」掲載

(略) 昭和9年に弟が学校を卒業しましたので、牛1頭を買い入れ、牛乳を出荷するようになって家の収入も良くなり喜びました。11年は作柄は6~7分くらいで、富丘地区に救済工事があり、弟と2人で作業の全日数働きました。11年は少し豊作でした。10月には網走から常呂まで鉄道が開通し、大変便利になりました。

*注：昭和11年10月10日 網走・常呂間の湧網東線全通、開通祝賀会開催

「当直日誌」には、「午後1時半より常呂小学校運動場において祝賀会開催、式開始より閉会まで約1時間、招待客約350名、村内出席150名、後祝宴盛会裏に終了。午前9時旗行列、午後6時半提灯行列、他に相撲、芝居などをなす」と記載

12年の冬は雪が多く、畑は一面1メートル以上の積雪となり、鉄道も除雪人夫が足りなく苦労していたようでした。2月10日から大吹雪となり、3日間は外にも出られないくらいでした。4日目(注：14日)になってやっと少し良くなり、太陽も見えるようになりました。汽車は不通で、その日の夕方、丸通の人が土佐青年団の藤田団長のところに除雪に出てくださいと頼みに来ました。午後6時頃で全員に連絡もできず、役員だけで出勤することになったのです。1日の賃金は1円でした。

翌日(注：15日)も大きな雪が降り、西風が強くと大吹雪でした。ラッセル車が10時頃通過したので、後から汽車が来ると思い12時まで待ちました。

その後、駅から12時半に汽車が通過する旨連絡が出ていたそうですが、私たちの現場までは来ませんでした。12時をだいぶ過ぎ、昼食に田房さん(注：現東浜)の物置を借りていたので、食事に行く途中大遭難となりました。(注：現在の東浜で、線路を通過する列車にはねられたことを指します)13名のうち5名が即死、5名が重傷、3名が無事でした。その後、網走で1名が亡くなりました。(略)

私は意識不明で15日間過ごしました。負傷者と即死者の遺体が午後2時半から運ばれ、5時頃知らせで親たちが病院に着いた時、廊下は負傷者の血が流れて真っ赤に見えたそうです。

私は重傷で最後の診察になり6時頃でしたが、切り傷が12センチで、傷口が丸くなり握りこぶしが入るくらいに見えたそうです。親たちは脳みそが出ているので、バカになるのではないかと心配したようです。2日頃から大変暴れ出し、土佐の青年たち6~7人がかりで押さえつけていただいたようで、そんなことで弟の告別式も2日ほど延ばしたという話でした。3月3日に意識が戻り、自分ながらびっくり致しました。脳の負傷ということで4月5日に札幌鉄道病院に入院。身体は達者になりましたので毎日が退屈で困りました。脳欠損傷は自然療法が一番良いとのことで7月自宅療養となりました。(略)

*注：「当直日誌」から

2月14日 吹雪のため、列車運行せず

2月15日 午後零時半頃、東浜田房氏付近にて除雪人夫10名、轢死もしくは重傷を負う

「常呂川の洪水に思う」（抜粋・編集）

昭和37年8月 台風9号対応の思い出 齊藤秀信

『常呂川治水史』（昭和62年2月発行）掲載

昭和36年8月、白滝村助役から常呂町に転じて、未だ町のようにも良く分からない8月中旬（注：8月4日の記憶違い）の午後10時頃だった。日吉支所長からの電話で「築堤中の日吉地区堤防が常呂川の増水で崩れ始めたので、役場職員の応援を願う」という連絡が入った。

早速、在庁の職員数十名に呼集をかけて、ダンプカー2台と消防車1台に分乗して駆けつけた。

前日来の雨は止んでいたが、常呂川は増水し、堤防すれすれに濁流が押し寄せ、土盛りが固まっていないため、今にも崩れそうであった。すでに地域の人たちや消防団員が来ていて土のうを作り防護活動に懸命であった。その応援をしてようやく12時頃から水位が下がり始め、引き揚げることにした。

下流の方はまだ増水していて福山の平地一面や豊川から下流の堤内地一帯の畑は見え、白々と冠水した水面と流れる水の音が重く響いていた。道道は日吉へ来る時通行できたのに、福山の22号付近は溢水が通路に進入して40～50センチの深みに達していた。1号車は水煙を上げて突破したが、後続の車は途中で停車したら終わりという心配があったので空車で走ることにし、人は下車して道路際の山林を歩いてようやく帰途についた。

朝、常呂川岸に立つと、役場庁舎裏から対岸まで普段は草原である河川敷が一面濁流となって、すさまじい速さと勢いで流れていた。

私が常呂川の水害に遭った初めての思い出である。（略）

*注：『常呂町農業協同組合創立20年記念史』では、この台風被害のことを「9号台風の本道上陸により、8月3日より降り出した雨は常呂川上流でおよそ180ミリバールに達し、8月4日午後7時ごろより増水、日吉以北の農地に甚大なる被害を与えた。

この洪水は昭和16年以来のもので、被害面積812町歩、被害農家195戸、総額77,184千円となった」と記載。

*注：この台風9号の被害状況については、「あのときの常呂・写真館55号 昭和37年8月3・4日台風9号による洪水被害」に、「広報常呂」の特集ページを付けて紹介。

*注：「広報ところ」10月号では、台風9号の被害に寄せられた義捐金・義捐品を紹介しています。

義捐金（常呂地区校長会・浜佐呂間中学校生徒会・常呂町内小中高児童会生徒会
・北教組常呂支部・水津恵子・伊藤瞳・伊藤重次郎・生長の家白鳩クラブ・藤田綾子・常呂商工会・町役場理事者一同・町役場職員一同）

義捐品（常呂町内小中高児童会生徒会：衣類・学用品 錦水小中校児童生徒会：学用品）

*また、「福山小学校では、汁粉会を開き、災害に負けないでしっかり現況してくださいと子どもたちを激励しました」と紹介。